

桃太郎のすべて



桃太郎はいったい誰なのか！
なぜ、鬼を退治できたのか！

脇田歩美

桃太郎のすべて

目次

プロローグ

桃太郎のすべて――――

エピソード――――

—プロローグ—

—この物語は、昔話を元にした、二次創作である。—

むかし、むかし

お婆さんが、川で洗濯をしているとどんぶらこどんぶらこと大きな桃がながれてきた。お婆さんはその桃を持って帰り、芝刈りにでかけていたお爺さんが帰ってくるとその桃を切ろうとしたところ、玉のような男の子が生まれた。

お爺さんとお婆さんはその赤ん坊を桃太郎と名付け大事に大事に育てた。桃太郎はすくすくと育ち、桃太郎はある時村人から人々をおびやかす鬼のことをきいた。その鬼たちは「鬼ヶ島」という島にすんでいて、度々村にやってきては村人を脅かしていたのだつた。



桃太郎は、その鬼退治に出かけることになった。そんな桃太郎にお爺さんは「日本一」とかかれた旗と桃の絵をかいたはちまきそして日本刀を持たせ、お婆さんは「きびだんご」と着るものを与えた。

桃太郎が鬼ヶ島に向かう途中、桃太郎に犬とさるときじが同じように声をかけてきた。

「そのお腰につけたきびだんごどうか私にください。」

桃太郎は、3匹にきびだんごをあげ

ると3匹も一緒に鬼退治に加わることになったのだった。

桃太郎は、鬼ヶ島につくと鬼たちがいて桃太郎と動物たちにたちむかつてきたが、みごと桃太郎は鬼たちを退治し、鬼たちが村人からうばった財宝をとりかえした。

…。

鬼たちは、戦いの最後にいくら戦っても歯が立たない桃太郎たちにたずねた。

「なぜ…、なぜだそんなはずはない。俺たち鬼が人間ごときにこうもやられるはずかないお前は、いったい何者…。俺たちがかなわないのはただ一人…まつまさか。」

―桃太郎のすべて―

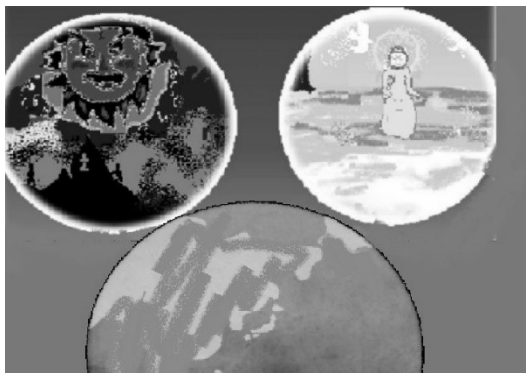
ここからは、桃太郎が生まれる以前のおはなし。

むかし、むかしはるかむかし

広い海の真ん中に、岩ばかりで囲まれたぶきみな島があった。

その下では大きな地震がおき、その地震のせいで繋がってはいけな場所繋がる穴ができてしまった。その穴は、地獄につながってしまったのである。

私たちがすむ世界には命あるものが存在するこの世と死んだ者が行くべき場所あの世があり、あの世には天国と地獄がある。天国は生前まっとうに生き選ばれたものがいきそこには死んだ者たちが生まれ変わるまで見守る神々と天女（天使）が存在する、一方地獄は生前罪を犯した者が生まれ変わるまで罪をつぐなされる場所、そこには、罪人をはる門番である恐ろしい鬼が存在し地獄や鬼、罪人を管理する地獄の神えんま大王が存在する。えんま大王は、鬼より体が大きく恐ろしい顔つきをしているが神である。



この世とあの世の境目に身をおき死んだ者を天国におくるか地獄におくるかを決める大事な役目をはなしている。死んだ者は、三途の川を渡った後、必ず一度えんま大王のもとにおくられ、天国や地獄か進む道をきめられる。

地獄の鬼たちは死んだ人間が罪の深さをとぐなわせるために、人間が恐れおののきさからうことができないようえんま大王自身が生み出した怪物である。角をはやし、体は大きく肌の色は赤や青、黄色や緑、黒い色をした鬼もいる。鬼の中では黒鬼が一番恐ろし

いといわれている。そんな鬼たちも地獄ではえんま大王のいうことは絶対であり、さからうことはできない。鬼はえんま大王には忠実でえんま大王にくつしている。なぜなら、えんま大王は鬼を生かすことも消すこともできるからである。

しかし、えんま大王は心配であった。

鬼は人間の数と同じように数えきれないほどいる。ほとんどの鬼はえんま大王にさからうことはないが権力をもち強い力をもつ鬼の中には力をふりかざし時には地獄をかきみだすものもいた。度がすぎるものはえんまの手により消滅させられていたがすべてではなかった。鬼はえんま大王が生み出したものえんま大王も鬼をむやみに消したくはなかった。

えんま大王は、地震でできた穴の前でため息をつきながらいった。

「なんてことだ、まさかこんな穴ができるとは…なんとかしなければ大変なことになるな。」

死者たちにきづかれることはもちろんのこと、もし生きた人間がすむ地上と地獄をむすぶ穴に鬼たちがきづき地上におりてしまうことがあれば恐ろしいことになる。えんま大王の手が届かない地上におりてしまえば鬼たちは地上を荒し人々をおびやかすことが目に見えていたのだ。神であるえんま大王は、地上におりることはゆるされないのである。

えんま大王はいつこくもはやくその穴をふさごうとしていたが、えんま大王の魔力をもってでも自然の力でできた穴の威力は強く少しづつしか小さくしていくことしかできなかつた。えんま大王は、次々におくられてくる死者たちを裁かなければいけなかつたため合間をみてはその穴の場所へ行き魔力を使い穴を小さくしていた。

穴のまわりには結界をはり見えなくし、誰も近づかぬよう門番として信頼できる鬼を二人見張りにつけていた。

えんま大王の傍で使える鬼は何億という鬼の中でたった四人だけだつた。

その四人は、大鬼と言われえんま大王ではなくえんま大王の使いとして神々が最初につくりだした鬼だからである。他の鬼たちにとっては鬼の頭でありえんま大王と同じくさからうことができなかった。

えんま大王は穴の前にいた。

「もう少しだ、もう少しでふさぐことができる。早くせねば鬼たちに気づかれてはやっかいだ。」

穴を見張っている大鬼の一人がえんま大王に言った。

「えんま大王様の力を持つてでもふさげないなんて、自然の力というものはおそろしいですな。」

「わしの力が足りぬのだ。天国の神であればこんな穴すぐふせげるのだろうが。ここは地獄、地獄の神である私がなんとかするのがすじというもの。」

大鬼は、再びえんま大王に言った。

「大丈夫ですよ、ここはあつし（私）と大鬼たちが交代で見張っております。それに、鬼とてえんま大王様がいらない地上なんざ行っても面白くもなんともないでしょ。」

えんま大王は、大鬼の言葉をきいて言った。

「そんなことをいうのは大鬼であるお前たちだけだ。お前たち大鬼四人は神が作り出した鬼、地獄の鬼はわしが作り出した鬼。わしが作り出した鬼は心なき魔物だ。他の鬼の中にはわしがうつつとうしいと思っているものがうじゃうじゃいる。わしの下では大暴れできないからな。」

大鬼はふるふる震えていった。

「おお、なんと恐ろしい鬼がいるもの……っていつても鬼は恐ろしいのが当たり前なんです。えんま大王様をうつつとおしいとは、そんな身の程知らずの鬼は私どもが叩きのめしてあげましょう。」

そんなえんま大王と大鬼のやりとりを岩のかげからこっそりと盗みぎきしていたも

のがいた。極悪人の重兵衛じゅうべえであつた。

重兵衛は、生前何度も盗みをはたらき、罪なき人間の命をむやみに奪つてきた。重兵衛は地獄を屁とも思つていなかった、それどころか極悪人であるがゆえ地獄の空気を気に入つてさえた。地獄に居座りたいがために地獄でも悪さばかりをして楽しんでた。

「へへへ、面白い。地獄と地上をつなぐ穴だつて。鬼が地上にいくだつて、それはそれはぞくぞくするほど面白い。これをほおっておくわけにはいかないですなあ。」

重兵衛は、そそくさと鬼の中でも権力をもつ黒鬼のところにやってきた。

重兵衛はこつそりとまた岩かげにかくれ黒鬼をてまねきしてさそつた。

「黒鬼の親分。強くてもっとも恐ろしい黒鬼の親分ちよつときてくんねえ。」

黒鬼は重兵衛に気づき、大きな金棒を振りかざし驚かした。

「なんだ、お前は極悪人重兵衛だな。また、このようなくところにきよつてお前は煮ええぎつた鍋のなにいって苦しんでいるはずではないのか。」



重兵衛は、慌てて答えた。

「いやいや、あんな熱い鍋はもうかんべんですぜ。それよりいい話があるんです。」

黒鬼は、金棒をどんっと地面につきつけていった。

「いい話？なんだと！またなんか企んでおるだろ！地獄でちょこまかしよって！」

重兵衛は、また慌てながらいった。

「いえいえ、違います何も企んじやいませんよ。そんなことより、黒鬼の親分こないだちよこつとつぶやいておられましたよね？死人をおびやかすより生身の人間をおびやか

したほうがずっと面白いとか何とか……」

黒鬼は、仲間の鬼たちと話していたときに、つつい本音をもらしてしまったのだ。

黒鬼はきよろきよろしながら答えた。

「しー何をいつているんだお前はそんなこと言った覚えはない！」

重兵衛はにやにやしながら言った。

「またまた、本当は思つてらつしやるんでしょ？もともと死んでいる人間をおびやかすより生身の生きている人間をおびやかすほうがよほど面白いって、くくくつ。地上にいつて人間をおびやかす方が楽しいと思いませんか？地上ならえんま様もいなくて自由にあばれほうだいやりほうだい黒鬼さまの天下ですぜ。」

黒鬼は、目を大きくして言った。

「何がいたい……それ以上いうと姿形もないように握りつぶしてやるぞ。」

重兵衛はすぐさま言った。

「まあまあ、最後までお聞きくださいませ。地上につながる穴をみつけたんですよ。この地獄から地上に行くことができるんですよ。聞きたくないですか？ためらっているのはえんま様に穴をふさがれて地上にいけなくなってしまうですよ。まあ、いらないっていうんならしょうがないですがね、くくくっ。」

黒鬼は重兵衛の近くによりしやがみこんでいった。

「重兵衛それは本当か？本当に地上につながる穴があるのか？うそではないだろうな。」
重兵衛は、黒鬼が興味を持っていることにしめしめと思い、地獄の穴のことを黒鬼に教えた。

黒鬼は、地獄からでることなど考えたこともなかったが初めて心を震わせた。地獄ではえんま大王の目からのがれることはできない。地上さえいけば、えんま大王のいいなりにならずにすむ自由にあばれほうだい、そして生きた人間の怯える姿が見える。

黒鬼は、手を震わしながらつぶやいた…。

「ははは、俺様の天下…。」

黒鬼は、自分に従えている仲間の鬼たちを呼び穴の話をした。

鬼たちは、それぞれに口走った。

「それは、本当ですか。悪徳重兵衛めえんま様の後をつけるとはふとどきなやつ。」

「わたらの仕事はここ（地獄）にきた罪人をおびやかすのが仕事ですわな。生きた人間なんて考えたこともありませんぜ。」

「黒鬼のアニキ、えんま大王様に見つかりでもしたら消滅させられますぜ。」

黒鬼は、また目を大きくして言った。

「しー声がかい！馬鹿者たちめ、俺たちは鬼だ。こんなうじょうじよ鬼がいる場所じや人間たちもそのうちなれてくる。重兵衛を見て見る俺たちを怖がりもしなくなってるじゃいか。地上には俺たちを知らない生身の人間がいる。そんな人間の前に俺たちがあらわれて見る、慌てふためき怯えるだろう。それにな、地上にいけばえんま大王がいな

い、俺たち鬼は自由にできるんだ。俺たち鬼の天下だ。」

鬼たちは、目を合わせ一瞬考えた。一番背の低い赤鬼が言った。

「そりやうまくいけば、俺たちの天下ですが。何もかもおみとおしのえんま様の目をこまかして穴に飛び込むなんざできますかね。」

そこに腰を低くした重兵衛はやってきて言った。

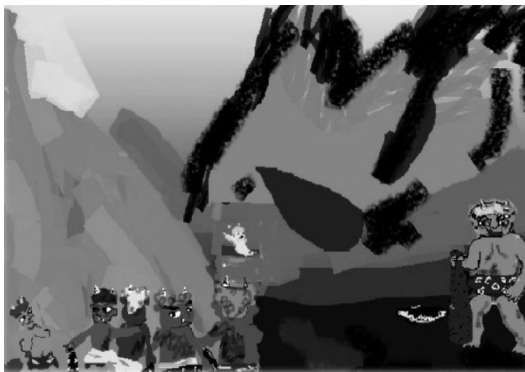
「鬼の親分さんたち、決意はされましたか？早くしないと穴がふさがってしまいますぜ。」

黒鬼は、どなった。

「ああ！もうよい！どいつもこいつも！えんまえんまとおくびようものめ！俺様一人でも穴に飛び込んでやるわ！」

重兵衛はいつものようににやりとして言った。

「さすが、黒鬼の親分だ。いいですかい親分、穴の近くには大鬼様たちが見張ってます。



わしがうまいこと大鬼様たちを穴から引き
離しますからそのすきに穴に飛び込んでく
だせえ。タイミングのがしたら終わりです
ぜ。」

えんま大王が、あの世にきた多くの人間たち
を地獄にいくか天国にいくかさばいていい
る間に、黒鬼は重兵衛を引き連れ穴に向かっ
た。ためらっていた他の仲間の鬼たちも黒鬼
がいくならとついていった。遠くからは穴は
みえなかったが重兵衛が隠れていた岩かげ
からは穴と大鬼の姿が見えた。

重兵衛は言った。

桃太郎のすべて

立ち読み版はここまでです